

産学・国際間共同によるデザインの実践的研究

— 萩開府400年記念・竹が創る21世紀事業 —

「竹を着る — 日本&フィンランドの風 — 」 & 「竹 MEETS フィンランドデザイン展」
を事例として

水谷由美子*代表

入江幸江** 縄田恵*** 永富真子***

Key Word: Fashion Design, Fashion & Environment, Ecological fabric, Bamboo, Soutake, Toray Inc., Chamber of Commerce and Industry of Hagi, Yamaguchi Prefectural University, University of Art and Design Helsinki, Finland Design

1. はじめに

筆者のフィンランドとの交流は、やまぐち文化発信ショップ・ナルナセバ事業として、ヘルシンキ市立美術館（フィンランド）と山口県立美術館とのコラボレーションプロジェクトにおけるミュージアムグッズの開発をきっかけとして始まった。そして、2002年にヘルシンキ芸術デザイン大学に半年間、客員教授として滞在する間に、いくつものプロジェクトを立ち上げ、現地の学生やデザイナーとの交流を図り、成果として、デザイナーや学生との交流および地域間交流の振興、多数のプロジェクトの実現を果たした。

こうした交流の流れの中で、萩の竹を用いたフィンランドデザイナーとのコラボレーションの企画「竹プロジェクト」を立てることになった。その結果が、萩商工会議所が中心に立ち上げた竹が創る21世紀開催実行委員会（実行委員長：刀禰 勇）主催による萩開府400年記念事業「竹を着る—日本&フィンランドの風—」と「竹MEETSフィンランドデザイン展」である。筆者は企画提案をするための任意のプロジェクトを作り、萩商工会議所に提案し、その素案が上記の事業に生かされ、おおよそその事業内容と規模が実現された。

本研究では企画に携わった筆者と縄田が、それぞれの立場で企画の過程を述べることにする。縄田はNHK山口放送局キャスターであり、現在は筆者の研究室の一員である。キャスターとして竹に関する番組に携わってきた立場と、大学院生として研究目的でこのプロジェクトに参加した立場で述べることになる。さらに、ファッションデザインの立場から

は、筆者とともにファッションショーの運営と作品のデザインおよび制作をした入江と永富が、それぞれの作品について自己検証する。（文責：水谷）

2. 「竹プロジェクト」の企画から萩開府400年記念・竹が創る21世紀事業へ

筆者はデザインの分野でも特にファッションデザインの領域を専門にしているが、今日のデザインにおいては環境問題なども視野に入れながら、生活デザイン全体との関連の中でデザイン活動をして行く必要性から、広く建築、インテリア、家具および生活用具などのデザインにも興味を示して来た。今回の「竹プロジェクト」の企画は、そういう意味でファッションを中心にしながらも、広いデザイン領域に跨り企画立案できたことは有意義であった。

しかし、本稿においては、その内容が多岐に渡っているため、特に内容に関する記述についてはファッションに絞ることとする。企画については、基本的に「はじめに」で述べたように筆者とフィンランドデザイナーとの出会いなどについても言及する。なぜなら、時間的な交流の積み重ねがあったために、次々にプロジェクトが実現して来たこと、そして企画というものがそうした出会いと継続的な交流によってもたらされてきた様子を記すことは実践的研究にとって価値があると考えられるからだ。

①竹プロジェクトの立ち上げ

萩商工会議所から山口県立大学附属地域共同研究センターに2001年に委託研究の依頼があり、竹ブランド化推進協議会の発足そして事業化に向けて、2002年から本学で4つのテーマの研究が開始した。筆

* 山口県立大学大学院国際文化学研究科教授

** 山口県立大学大学院国際文化学研究科2年

*** 山口県立大学大学院国際文化学研究科1年

者は上記研究センターの研究者と運営委員の立場で会議に参加しているが、そこで安溪遊地委員（山口県立大学教授）から竹繊維でスーツが製作された情報などが紹介された。竹繊維に興味を持ったのはこれが最初である。後で調べるとそれは、野村産業（名古屋市）が初めて竹を複合させた竹繊維を開発し、特許を取ったために新聞など業界内外に記事として取り上げられたものであった。

2004年に萩において開府400年記念行事があり、エコロジー繊維である竹繊維の開発を東レ株式会社が行っていることを、上記委託研究に参加していた井生文隆氏（山口県立大学助教授）から伺い、竹をテーマにファッションの商品開発とショーを計画することを着想した。

エコロジー繊維に関しては、1980年代から従来の自然素材である綿や麻に加えて、植物や果物から生み出される繊維がアパレルで実験されて来た。そして各種のエコロジー繊維への関心は年々高まりを見せていた。筆者は2001年に山口県で開催された「きらら博」における「いきいきエコパーク」の制服デザインを県庁の県民生活課から依頼され、とうもろこし繊維であるラクトロンを使用したこと（カネボウ株式会社協力）をきっかけとして、エコロジー繊維に関心を持つようになった。

しかしながら、萩の地域性を考慮すれば、萩の竹ブランド化推進協議会に竹の商品開発研究を提案する際、ファッションの分野の企画だけでは理解が得られにくいと判断し、ファッションを包括する生活デザイン全般を視野に入れた事業を提案することにした。

商品開発となると壮大な計画となり、プロジェクトを立ち上げるに当たり事業の実現性について、リサーチをする必要がある。そこで、特に企画のコンセプトや方向性さらにメディア対策などの観点から、出版やデザイン企画を多角的に手掛けてきた築尚志氏（株式会社アスキー）に相談し、テーマやコンセプトにおいて多大なアドバイスを得た。また、企画提案において、メディアにおける発信の可能性や発信力についての背景を計画するために、地域メディアの人々（宇佐美亘・末弘恭雄・縄田恵：NHK山口放送局放送部長・報道責任者・キャスター）にも相談した。すでにNHK山口放送局では、萩と竹問題はニュース等で取り上げられていて、その後のニュースや番組作りに対して、こちらからも新しい動きとして情報を提供することになった。

萩の竹が創る21世紀事業が実現されることが決定された後には、NHK山口放送局もこれを機に年間を通じた番組作りをすることになり、筆者もアドバイザーとして協力した。縄田は、これらの番組を中心に進めることになったと同時に、筆者の研究室に大学院生として入り、竹プロジェクトを推進するメンバーとして活動している。

②フィンランドデザイナーとのコラボレーション

2001年から筆者とフィンランドのヘルシンキ芸術デザインとの交流が始まり、若手デザイナーや学生を山口に招待し、交流を行ってきている。具体的には、筆者が実行委員およびショーの演出を手掛けているジャパンファッションデザインコンテスト・イン山口や主体的に開催しているクリスマスファッションショーに参加してもらっている。ナオト・ニドメ氏はそのデザイナーの一人である。彼は現在、ヘルシンキ芸術デザイン大学大学院で建築と家具のデザインの分野に席を置くとともに、ファッションデザインの学部にも席を置くというユニークな立場を保持している。プロのデザイナーとしても活躍し、NYやミラノなどで高い評価を得ている。そこで彼を「竹プロジェクト」のフィンランド若手デザイナーの柱の一人として選んだ。

2002年の半年間の滞在で、ファッションを越えた分野のデザイナーとの交流も生まれ、広がりある企画の環境が整備されたと言える。同時に、萩市でも井生氏が「竹のデザイン・フィンランド+日本」を開催し、そこに来日したデザイナーとの交流を（有）ナルナセバにおける山口県立大学大学院サテライト研究室でも持つことができた。そこで、はじめてハンヌ・キャホネンHännu Kähönen氏とも出会い、竹を巡る今後へのデザインの夢などを語り合った。

キャホネン氏は最近ではヘルシンキ市の市電デザインをするなど、フィンランドを代表するインダストリアルデザイナーの一人である。萩の竹による工業製品の開発に大きな関心と期待が感じられたので、開発のもう一人の大きな柱としてキャホネン氏にお願いすることを決めた。井生氏はそれまでの2回の展示会を発展させて「2004竹のデザイン・フィンランド+日本」を「竹MEETSフィンランドデザイン展」（萩会場のみ）において実施することになる。

最終的な「竹プロジェクト」案は、フィンランドデザインによって自然な竹や合板としての竹を用いた竹ハウス、家具そして生活用具などの工業製品としての商品開発と、竹繊維を用いたファッションデ

ザインの商品開発をすることになった。地域の産学の任意のプロジェクトから発した企画が温められて、筆者のグループは2003年秋に萩商工会議所に対して、竹繊維を用いたファッションのデザイン開発とフィンランドデザインによる竹ハウスとインダストリアルデザインの最終提案を行った。

ファッションに関して東レ株式会社から多大な協力を頂いたことを記しておかなければならない。企画をしていた2003年9月に時宜を得て、東レ株式会社が竹繊維「爽竹」の商品開発に力を入れるという決定をしたところであった。この方針が我々の計画の後押しをすることになった。素材提供をお願いするために8月から9月にかけて2度ほど東レ株式会社大阪本社を訪ねた。11月にはナオト・ニイドメ氏も伴って、東京で開催された爽竹コレクションにも参加した。こうした中で爽竹を開発している責任者の短繊維事業部長・安藤敏彦氏、婦人・紳士衣料事業部長・村山 良氏とスタッフの稲村光代さんと交渉を続け、最終的に基本的コンセプトが理解され、素材提供の可能性を聞き、本格的に企画を進めることになった。

結果的に事業の最終的な形として「竹が創る21世紀」事業（竹が創る21世紀イベント開催実行委員会委員長：刀禰 勇）が立ち上がり、産・官・学の連携をする形で、「竹MEETSフィンランドデザイン展」と同時開催のステージイベント「竹を着るー日本&フィンランドの風ー」が実現することになった。萩商工会議所が申請した「竹が創る21世紀『竹meetsフィンランドデザイン』」事業は、2004年度中小企業庁JAPANブランド育成支援事業(1)として採択され(2)、全国紙でも代表的な採択事業として紹介された(3)。それは全国でももっとも高いレベルの評価を得て支援されたことを意味している。

そして、ステージイベントは財団法人自治総合センター・竹が作る21世紀開催実行委員会によって主催されることになった。おおよそ、提案した企画が認められ、竹をテーマにした総合的な舞台が実現されることになった。そこで、筆者は運営面においてクリエイティブディレクターとして、ステージイベント全体の運営をすべて依頼された。

結果的に我々のプロジェクトが提案した「竹MEETSフィンランドデザイン」というテーマが採用されて、展覧会「竹MEETSフィンランドデザイン展」と「竹を着るー日本&フィンランドの風ー」が実施され、ファッションはショーのみならず、展覧会で

も展示されることになった。ナオト・ニイドメ氏のファッション作品は竹ハウスの中で空間と一体化した表現が目指された。展覧会は萩市民館（萩市）で11月17日から23日まで、そしてリビングデザインセンターオゾン（東京）にて11月26日から12月26日まで実施され、当初の遠大な計画は実現されたのだ。

最後に記しておくが、萩で実施される企画には有限会社ナルナセバ（山口市）が、そして全体にはS2株式会社（東京）が企画協力をしている。（文責：水谷）

3. 「竹が創る21世紀事業」におけるフィンランドデザイナーとのコラボレーション

①萩にとって竹をテーマとする動機と背景

萩の竹林面積は山口県の林政課の作成資料によると全国2位となっている。山間部が多いといった地形のためではなく、すすんで竹を利用するために「植竹」したことによる。戦前、竹のすだれを海外に輸出するほど、萩では竹を素材として利用してきた。さらには、戦後すぐに「竹紙」を生産すべく、さらなる「植竹」をおこなった。しかし、竹の加工品の輸出はすたれ、「竹紙」事業も失敗した。竹は過剰な状態となってしまったのである。しかも、その後の経済成長で、竹林の多くがある中山間地の里山は、高齢化、過疎化に襲われ、竹は人の手が入らない状態で放逐されていった。竹はわずか三年程度で成竹となるなど成長が早いゆえに地下茎でも広がる。そのため、放逐された竹は、雑木林や杉・檜となど植林された土地に侵食し、広がり続けているのである。人の手で食い止める以外に方法はなく、竹林面積の広がり、里山の崩壊と植林事業の危機を表しているといえる。

2003年7月のインタビューの中で萩市の職員で樹木医でもある草野隆司氏は、「萩を代表する景観・指月山が、みるみる竹林に覆われてきて、その美しい姿が無残な形に変わるのを見るのは忍びない」と語っている。

竹を使った産業を興すことで、地域活性化と竹林問題を解決したい萩は、県立大学との共同研究を2001年から行ってはいたが、これといった具体的成果を見出すにはいたっていなかった。

②フィンランドデザインに求めたもの

今年度3回目を迎えたクリスマスファッションショーといった地域の活性化も目的とした事業がある。これは当研究代表の山口県立大学・水谷由美子教授

が中心になって行っているもので、2002年のこのファッションショーに、ゲストとして招待されたのが新進気鋭のフィンランドデザイナーのナオト・ニドメ氏であった。

筆者はNHK山口放送局のキャスターとして、このコンテストを取材し、ニドメ氏に特別出演をしてもらい放送した。時を同じくして、萩商工会議所から山口県立大学付属地域共同研究センターへの「委託研究」があり、その一環として山口県立大学の井生文隆助教授が中心となって行っていた、竹を使ったフィンランドデザイナーの小さな作品を集めた作品展が萩で行われた。フィンランドのデザイン力に期待したものであった。こちらも取材し、萩における竹の現状、竹林被害を視点に放送した。

竹林の広がり環境問題として深刻であることは、ほとんど知られていなかっただけに、身近な問題としての反響は大きかった。この放送の際に、東レが竹の繊維を開発し、その服地「爽竹」があることもあわせて紹介した。作品展の放送を見ていたニドメ氏が「竹」繊維に興味を持ったのはこの時がはじめてであった。この時点ではフィンランドデザイナーたちは、この作品展で竹と接触しているわけだが、竹に対して本格的な興味、深い洞察は持っていなかった。しかしこの作品展が「竹プロジェクト」の重要なきっかけだった。

その後水谷教授と筆者とが竹作品展に参加した巨匠のハンヌ・キャホネン氏やナオト・ニドメ氏らと、竹を取り巻く現状、環境問題などについて、話し合いを繰り返し行い、水谷教授の企画グループとフィンランドデザイナーとの「本格的」なコラボレーションを図ることになる。エコロジーといった視点での竹を用いる、ファッション・建築・家具など幅広いデザインを目指すという形で「竹プロジェクト」構想を立ち上げ、事業主体として萩に提案することとなった。また、実際に竹作品を製作するために必要不可欠な素材確保と技術的支援の獲得のために、プロジェクト立ち上げと平行してリサーチ・協力要請を行った。その結果、東レからは竹繊維「爽竹」の素材提供を、大分県竹工芸・訓練支援センターからは竹加工の技術協力を得ることが出来た。

フィンランドデザイナーたちと共に追求し、そして新たなコラボレーションを可能にしたのは、デザインの背景にあるエコロジーといったコンセプトであり、哲学であったし、この哲学があったからこそこうした支援・協力を可能にもしたのであった。

筆者はキャスターとして、竹問題やこの新たなコラボレーションを、環境・エコロジーといった視点で放送に取り上げることにしたし、その後、大学院で研究をして深めることにもなった。日本の小さな地方都市・山口でのフィンランドデザイナーたちとの偶然の出会い、交流、竹への強い関心からの出発であった。

③今後の商品開発に向けた意気込みと可能性

竹林問題に直面する萩に、今回の「竹プロジェクト」について提案し萩がその主体となった。竹の工業製品化を目指した萩商工会議所が中心になって行った「竹meetsフィンランドデザイン展」は、萩と東京で行われ、2004年12月26日に成功に終わった。

世界を代表するインダストリアルデザイナー・栄久庵憲司氏は、このデザイン展を「フィンランドデザイナーが、日本人の固定観念から竹を解放した」と絶賛した。特に、ナオト・ニドメ氏がデザインした長椅子は、「すぐにでも工業化して商品になるだろう」とも言及している。竹という素材に新たな命を吹き込んだフィンランドデザイナーの作品は、大いに期待されるものとなっている。この一年間の取り組みは、逐次放送に取り上げてきたし、30分の番組として放送もした。

筆者は実際にフィンランドを二度訪れ、デザイン大国をこの目で見てきたし、その背景となるエコロジーといった哲学的部分も、厳しい自然環境の中で自然と共生するライフスタイルを通して、多少は感じ取ってくる事が出来たように思う。今後、事業化を目指さなくてはならない萩には、展示会場で行ったアンケートの集計・分析、竹加工技術の確立、製作にあたっての工場の設立、販路の確立など様々な課題が残っている。しかし、エコロジーといったコンセプト、つまり自然を敬うというフィンランドデザインの哲学的背景は、日本も古来から存在する考え方であり、必ずや日本の消費者に受け入れられるものと期待できる。

水谷教授が冒頭にこのレポートの位置づけをしたように、今回、竹を通してフィンランドと日本という異文化が継続的に交流することで、新たなデザイン・文化、プロジェクトが生まれるダイナミズムを実体験することとなり、一方で研究対象としてみる事が出来た。国際交流がよい意味で結実したわけだが、そこには何度も記したように、共通のコンセプト・エコロジーといった思想・哲学を共有出来た事、またそれを、竹をデザインすることで具現化し、

表現する事を、困難でありながら全員が楽しんだ事が大きいだろうと考える。その秘密は、竹の魅力もさることながら、「信頼」だったかもしれない。

(文責：縄田)

4. ステージイベント「竹を着る－日本&フィンランド」について

ステージイベントに関しては、2004年は上述したように萩開府400年にあたっているの、ビジネス的な目的をもった商品開発研究のみならず、文化、芸術的側面から竹をテーマに、地元の人々の参加によってステージを作るという提案もしていた。内容と予算の枠組みが出来た後、竹が創る21世紀イベント開催実行委員会から竹をテーマとした音楽劇やダンスパフォーマンスも含めたファッションショーをしてほしいと依頼を受けた。このステージイベントの衣装の素材は、特殊な素材を除きほとんど東レ株式会社の「爽竹」によって制作することになったことは、幸運であった。東レの稲村光代さんとは数回に渡り東京本社で会合を持ち、多大なご支援を頂いた。「爽竹」はかなり幅広く開発されていて、その中から多様なデザインのために素材選びをして頂いた。また染色して頂いたものもある。

この場をお借りして深くお礼申し上げたい。

音楽劇の構想においては、萩の子供達に竹林や竹素材への関心を持ってもらうことを目的にしていた。竹音楽に詳しくまた小学生の音楽ワークショップ経験が豊富な大阪市立大学大学院教授・中川真氏および舞踊家・佐久間新氏に指導を依頼した。萩市教育委員会の選定により萩市立白水小学校の皆さんに竹の音楽劇の創作を依頼した。6月から本番の11月まで半年に渡るワークショップを経て、竹の音楽劇「七色の竹の物語」が完成した。(写真1) 既成の曲や劇の上演ではなく、子供たちが一から作り上げて上演するという学習方法は、あまり小学校では見られないもので、新しい実験となったに違いない。

またダンスパフォーマンスでは、かぐや姫伝説をテーマに、日本の竹をイメージして作品を作るよう、リル・レイ・ダンス・スタジオのREI・KOさんにダンス作品を依頼した。REI・KOさんは長年、萩の劇団さくら組の指導に当たって来られた方なので、萩の舞台関係の人々から舞台美術やスタッフとして多大な協力が得られた。ダンスパフォーマンス「な・よ・た・け」(写真19) はかぐや姫の生涯を描くものである。「七色の竹の物語」同様に、それぞれ独立し

た小品として自立し得るもので、上演後、再演への期待の声が多く聞かれた。

筆者が上記2つのパートの衣装デザインをしたこともあり、ステージイベント全体が衣装を通じて視覚的にまとまりをもたせる機能を果たしたように思う。

ファッションショーの部門ではフィンランドにおける新進気鋭のデザイナー、ナオト・ニドメ・デザインの「アトミック・ヴォヤージュ」、山口県立大学水谷研究室が創作した「竹のある近未来生活」と「ナルナセバ・コレクション」を発表した。

ナオト・ニドメ氏には20代の女性のファッションデザインを、本格的な商品開発として依頼した。筆者がディレクションをして岡部泰民氏(ブルーウェイ株式会社PDセンター・山口市)にプロダクトプロデュースを担当してもらい、山口市にて製造することになった。

ナオト・ニドメ氏はこの竹繊維との出会いをうまくとらえて、2004年8月にフィンランドを代表するテキスタイルとファッションのメイカー、マリメッコから竹繊維を用いてデビューした。2002年に筆者がニドメ氏をフィンランドから山口に招聘し、第3回ジャパンファッションデザインコンテスト・イン・山口やクリスマスファッションショーVol. Iに参加してもらった。さらに、第8回国際ファッションフェアなどで商品開発やブースデザイン、さらに「異文化交流とファッションデザインに関する産学連携による実践的研究」(平成15年度山口県立大学大学院紀要収録)に参加しており、筆者と共同でプロジェクトを進めて来た若手デザイナーである。ニドメ氏はファッションの他、実行委員会から「竹ハウス」の総合プロデュースも委嘱され、竹のある空間をファッションをも包括して提案をした。

新しいエコロジー素材「爽竹」を提供して頂いた東レ株式会社、また舞台装置制作において協力を得た山口県農林部林政課、萩市の劇団さくら組、萩市立白水小学校の諸先生および生徒さん、萩を代表する簾作家平井恒夫氏(平井製簾所) およびニドメ氏作品を製造プロデュースおよび製造したブルーウェイ株式会社PDセンター、竹工芸のリサーチを支援してくれた大分県竹工芸・訓練支援センター、さらにヘルシンキ芸術デザイン大学大学院、山口県立大学の各スタッフの皆様など、多くの人々の協力と支援を受け、ファッションデザインによる商品開発および文化的ステージイベントを実現することができ

た。おおよそ総勢170名が直接的に関わっている。この場を借りて深くお礼を申し上げたい。

詳しくは参考資料として掲載したプログラムにあるように、第1部では、萩市立白水小学校の生徒45名が、竹を巡る物語と歌そして楽器を創り、ミュージカル仕立てで「七色の竹の物語」を発表した。第2部では、「なよたけのかぐや姫」から着想された創作衣装と、エコロジー素材から着想された近未来ファッション、および大学院生によるナルナセバコレクションを、山口県立大学水谷研究室が提案している。第3部はダンス・パフォーマンス「な・よ・た・け」をリル・レイ・ダンス・スタジオが創作した。最後の第4部は、ナオト・ニドメ氏によるコレクションである。

上記の結果は、さまざまなメディアでも伝えられたが、竹関連イベントに参加した人々の反省会に出席して、成果について人々の好印象を直接的に肌で感じる事ができた。フィンランドデザインの竹ハウスやインダストリアルデザインの成功はもちろんのこと、ファッション部門では、今までファッション文化があまり意識されて来なかった萩の人々に大きな関心呼び起こしたことは成果であった。その結果、今後ファッション部門でナオト・ニドメ氏によるコレクションを中心に商品開発が行われる期待が生まれてきた。

5. 爽竹コレクション

①エコロジー素材である竹繊維の開発

竹は日本に古来より生息している真竹、中国から伝来した孟宗竹など、多くの種類がある。私たちの生活の中には、古くから竹は身近な存在だった。人々の日常生活では生活用具から建築まで多岐に渡り使われていたことは言うまでもない。茶せん、茶杓、簾、かご、竹刀、尺八、筆、絵画、物語などに至るまで、竹の影響を見ないものはない。その意味で、竹は人々の生活文化から芸術まで幅広い分野で存在感を示してきた。

しかし、3章で述べたように竹に変わる素材が生活を取り囲むようになり、生活を便利にまた潤いのあるものにしてきた竹の存在が、自然の生態を破壊し忌み嫌われるものにもなっている。地球環境が問われる中、ファッションの分野での一つの取り組みが、新素材を開発することによって、エコロジーの問題を解決しようとする取り組みである。爽竹もそうした考えの元で開発されている。一方で、企業倫理を表明することが

高付加価値繊維の開発を促し、新たなビジネスチャンスを生み出そうとする戦略でもある。こうした中で、竹もトウモロコシやパイナップルなど同様に、エコロジー繊維として登場した。

竹繊維は野村産業株式会社によって、世界ではじめて衣料用の繊維として開発された。そして野村産業は特許No.3448526号を2003年に取得し(4)、「バンブール」(主にウール混)を開発展開している。この特許を利用して、他社が「竹を原料とするセルロース繊維糸およびこれを用いた布帛」である竹繊維を開発している。東レの「爽竹」、倉敷紡績の「凜竹」「紫竹」(綿・ウールなどの天然繊維混)、日本毛織の「ニッケ・バンブール」(主にウール混)がその主なものである。

②爽竹(合成繊維混)の特性

東レ株式会社は、竹繊維に関して、野村産業、倉敷紡績、日本毛織の3社とともに、共同で高品質な竹繊維使用の品質表示マーク「竹マーク」を新たに設定している。「竹マーク」は高品質な竹繊維使用の素材であることを保証するとともに、品質の伴わない素材を使用した製品の流通を防止する役を果たしている(5)。

東レ株式会社は2003年からファッションの提案をしつつ、積極的に爽竹のテキスタイル・コレクションを発表し、ビジネスを拡大している。爽竹の綿(わた)の製造は中国四川省で行い、その紡績は日本で行っている。綿の輸入は上記企業を含め東レが代表で担っている。ビジネスの拡大と話題性の高まりの中、2005年3月から開催予定の愛知万国博覧会「愛・地球博」で使用される制服が2004年12月に公開された。愛・地球博の公式ユニフォームについては、「万博ユニフォームはエコ・デザイン環境素材に自然色」というコピーの元で、竹など環境に配慮した素材を使い、自然色が多様されている(6)。

「愛・地球博」のメイン会場は自然の竹を使用して設計され、制服にも竹繊維が用いられるなど、竹繊維などエコロジー繊維が、繊維界の最前線で注目されていることがわかる。こうした竹繊維の特徴を、愛知県のホームページを引用して、以下に説明する。

「愛知竹繊維の原料である竹はイネ科の多年生植物で熱帯から温帯に分布、成長が早いことでも知られています。短サイクルで再生産が可能であるため森林の伐採抑制につながり、自然に優しい繊維として注目されています。竹をほぐした繊維質をそのまま糸として使うこともありますが、一般に衣料用と

して使う場合、竹から抽出したセルロースを紡糸して糸にします。吸放湿が早く、他に通気性が高い、制電性が高い、といった特徴があるとされ、夏用のメンズ・レディース向けジャケット、パンツ、スーツ、カジュアルウェアとして商品化が進められています(7)。」

以上のように、環境繊維あるいはエコロジー繊維の一種として竹繊維が今、ファッション分野においてエコロジーを考える一つの手掛りとして重要な意味を持っている。爽竹の特徴は、以上の引用にあるように、吸放湿機能や接触冷感、抗菌防臭機能さらにマイナスイオン発生機能などを特徴としています。本論では、特に研究の目的が繊維研究ではないので、紙面の関係もあり詳しく述べることはできない。(文責：水谷)

③爽竹コレクション 1 by 山口県立大学水谷研究室

テーマは「竹のある近未来生活」と題して、伝説から着想を得た作品6点、近未来のライフスタイルをイメージした作品15点、ナルナセバコレクション8点そしてユニバーサルな観点をデザインに織り込んだ作品1点を発表した。各パートの代表的な作品の写真を掲載しているので、参考にしてもらいたい。

作品1. かぐや姫(写真2)：矢田紀子 石作皇子(写真3)：藤田智子

車持皇子(写真4)：依田香織 安倍御主人(写真5)：宮前恵美

大伴御行(写真6)：秋山麻理子 石上麻呂足(写真7)：神 大樹

(以上環境デザイン学科3年) 6点

作品2. スポーティブ&カジュアル・ウェア(写真8)：小笠原桃百子

ホーム・ウェア(写真9)：梅野愛子

ホームオフィス・ウェア(写真10)：河杉文子

ワーク・ウェア(写真11)：宮本舞

カジュアル&エレガンス・ウェア(写真12)：豊島理奈

(以上環境デザイン学科4年) 15点

作品3. 双生(写真13+14)：永富真子(大学院国際文化学研究科1年) 3点

重ねる(写真15+16)：入江幸江(大学院国際文化学研究科2年) 5点

作品4. 竹の風(写真17+18)：水谷由美子(デザイン) 岡部泰民(制作)

以下では作品3と4についてデザイナー自身が作

品について検証する。

③-1 作品3の解説

テーマ：「双生」 永富真子

昨年11月に「竹が創る21世紀」ステージイベント、「竹を着るー日本&フィンランドの風」の第2部「ナルナセバ・コレクション」で「双生」をテーマとした作品を制作発表した。

今回、作品に使用した素材は東レ株式会社で開発されている「爽竹」である。「爽竹」は現在、アパレル業界では主に紳士服、婦人服そしてインナー、アンダーウェア、シャツなどに用いられている。今回、東レ株式会社より提供して頂いた多種類の素材の中から、手触りが柔らかく、伸縮性に優れ、裏が透けないくらいの厚みのあるものを選択した。ジャケットに使用した生地には、かっちりとした形を維持させるため、部分的にハリのある布を重ねた。また、比較的面積の広いスカート部分、そしてインナーに使用する布地はバイアス方向に裁断した。「爽竹」素材は大変やわらかい風合いを持つためバイアス方向に裁断した時、身体に沿うとても美しいシルエットを生み出すのではと考えたからである。スカートやインナーで、バイアス方向に裁断した生地を使用した結果、身体の動きに合わせ、服がしなやかに揺れ踊るという新しい感動を得ることができた。

筆者は2003年より「絆」をコンセプトとして作品制作を行ってきた。最初に制作した作品は「絆-The Tie of...」をテーマとしたものであった。この作品には現代社会に生きる人々の希薄になりつつある「絆」についての筆者の考えが込められている。絆は目にみえないものである。紙一枚で結ばれる夫婦の絆、血で結ばれる親子、兄弟の絆、そして同僚。しかし、現代その絆は曖昧なコミュニケーションによって成り立っているにすぎない。携帯電話や電子メールの普及によって、便利で迅速になったコミュニケーションだが、便利さと同時に失ったものがあるのではないだろうか。筆者が考えるのはその失ったものの大きさである。「絆-The Tie of...」はそれらに対する意見を込めてデザインした。

今回の作品は「絆」の二作目にあたる。筆者にとって、今回のテーマである「双生：TWINS」は似た形を持つが、異なるアイデンティティを持ち、互いに求め合うものの象徴であった。それは、一人の人間の中に在る、もう一人の自分という「二面性」の意味も含まれている。

この作品ではTWINSの二つの存在を表現するために、全てを包括する「黒」と、それと対称的な「白」という色彩のみを用い、心に潜む明暗を表現した。演出では、黒のベールを用い人間の内面にある怖く、神秘的な二面性（双生）を表現した。

筆者は制作途中に発生するパターンに着目し、その形を用いることで「非完全」な人間を表現しようと考えた。また、トップス（ジャケット）では、出来上がった一つの服のパターンを鏡に映ったもののように左右対称に分解し、再結合させるという試みを行なった。このジャケットのパターンは、身体にフィットするよう細分化した。「爽竹」は伸縮性に優れているため、ジャケットの袖部分を身体にフィットさせても、動きにあわせ伸び縮みすることが分かった。制作段階で筆者が心配したのは、柔らかな風合いを持つ「爽竹」素材をジャケットに使用し、襟や袖部分のハリが十分に現れるかどうかという点である。しかし、「爽竹」は裏に芯を付けることで、筆者の求めるハリを持たせることができ、極細の状態の繊維が織られているため、予想以上の光沢感を得ることが出来た。

今回、素材を始めデザインやパターンにおいて、新たな試みができ大変貴重な経験となった。素材については、以上の試みの中で「爽竹」素材の持つ大きな可能性を実感した。今後「爽竹」など環境問題を視野に入れたエコロジー素材が、アパレル業界に限らず様々な分野で活かされることを期待する。

最後に、これらの素材を提供して下さった東レ株式会社に深く感謝の意を表したい。（文責：永富）

③-2 作品3の解説

テーマ：重ねる 入江幸江

竹は古くから日本人の生活の中に欠かせない存在である。その竹の爽やかさや伸びやかさを日本の伝統美である和服の直線に倣い、シンプルなメリヤス編みの作品を作った。編物は1本の糸から一目々々、一段々々、手や機械を動かすことで自分の思いが形づくられていく。著者の研究テーマであるメリヤス編みは、非常に古い歴史を持ち、また基本的な編み技法である。メリヤス編みの表面は、比較的平面なので、表情を出すために、メリヤスを「重ねる」をテーマに、ボリュームと迫力を出す手法を実験することにした。

筆者はメリヤスにこだわりを持つため、メリヤスを編む事に関し、気が抜けない手が抜けない。な

ぜならメリヤス編地は手が揃わないと微妙な編みむらが出る。機械編みにおいてはテンション（編機の糸通し部分の名称）の調子で糸の出方が変わり、編みむらが出るのである。基本的な編み方ではあるが、編物を長年編んでいる熟練者でもごまかすことが出来ないのがメリヤスであると言われる。メリヤスの利点は、編地のデザインを自由に描くことができる点である。また、針の太さや機械のダイヤルを変えること（ラフゲージ・ハイゲージにすること）で編物の持つ独特の柔らかさ、軽やかさを表現できることが最大の強みである。1本の糸からイメージを膨らませオリジナルな生地を編み、作品に仕上げるのが醍醐味と言える。

今回、このプロジェクトに参加する事が決まり、著者の分野である編物を制作するに当たり、竹の原綿を提供して頂き、紡ぐことから始めようと思いついた。しかし、竹100パーセントの原綿を紡ぐことは不可能だった。なぜなら、すぐに綿が切れてしまい、著者の素人（糸を紡ぐ事に関して）の手にそれは重荷だった。それ故に当初の希望を断念し、東レバンブー複合繊維（ポリエステル50パーセント。バンブー50パーセント）30番手を6キログラム、提供をうけることにした。

作品には、日本の美である着物の直線的なデザインを取り入れた。そして、現代のエコロジーとともに注目されているユニバーサルデザインを考慮して、年齢を問わずサイズもフリーで機能性や着易さ、利便性を備えているということ、デザイン構成の条件にした、また洗練されたデザインであることを目指した。さらに、流行にとらわれず現在のライフスタイルに合わせたデザインであることなどを考慮した。

制作手順として、まず、デザイン画を描きイメージに合うゲージを編むことからスタートした。30番手の糸は編むととてもやわらかく、1本では薄く弱すぎるので2本どりにすることにした。3点のシリーズ作品に関するデザインの狙いは丈の違うパーツを5段層にし（筍の皮をむいた後のふしをイメージ）、色は爽やかな黄色から緑系で染色した点である。染色は3点の作品ごとに丈は違うが、5層の組み合わせを計算して染めあげた。ボトムはバンブー不織布を提供して頂き、デザインの基本とされる○△□のパターンのスカートを作成した。必要に応じて機能と形状を自由自在に設計できる不織布の最大の特徴を生かして、切りっぱなしでそれぞれのパーツを簡単に組み合わせ接合させて作るという手法を用いた。

作品2点シリーズの内の1点は、ロングのアンダ

ワンピースの上に5枚のトップコートを重ね、筍の皮が何枚にも重なっている様を表現した。染色をする段階で色の決定は緊張した。もう1点は長方形の編地を6枚編み、うち2枚は肩でつなぎ、残りの4枚は前後2枚重ねにした。この作品では自然に作られるドレープでワンショルダードレスの形態で制作した。この作品の色は、1色にまとめ、差し色として生地本来の色を用いアクセントにした。以上5点の筆者の作品をショーで見ると、筆者の狙いであった重ねるといったテーマの意図が、モデルの表現でイメージした雰囲気が立ち上がっていた。

今回のファッションショー全体に提供された生地が、日本人の心と暮らしにすがすがしい力を与えてくれる竹からできていることに観客は驚いたであろう。このような竹繊維・爽竹が誕生したことは、人々の生活にクオリティーの向上が求められていて、環境問題と衣生活の関係が切り離せない問題になって来ていることを示している。

今後とも研究が重ねられ先進の紡績技術で、新素材が誕生し続けるであろうとの期待を抱かずにはおれない。今後とも社会や環境に目を向けて、新しい時代を表現して行けるように、素材にこだわった編物の作品を制作していきたいと考えている。(文責：入江)

③-3 作品4の解説

テーマ：竹の風 デザイン：水谷由美子 制作：岡部泰民

今回は「竹の風」と題して、竹の精のイメージを表現するためにデザインをした。特に、第2部の「かぐや姫と皇子」の作品とのイメージの連動性を視野に入れつつ、萩の竹林を散策した時に思い描いた印象を表現することを意図した。商品開発を目的とするのではなく、イメージ表現を重視した作品である。

第1部の竹の精や第3部の竹の精と同じ爽竹の素材を一番大きな面積の部分に配置し、その他は金襴や地元山口を代表する伝統織「柳井縞」(筆者の織デザイン)そして大胆な模様付き爽竹をパッチワークして素材作りをしている。このパッチワークは制作者を悩ませたに違いない。

特にブルーウエイ株式会社PDセンターは主にデニム生地などを扱っているもので、スタッフは布帛でも比較的安定した生地に慣れ親しんでいる。しかし、今回の生地はどれも不安定であり、それをさらにパッチワークするとなると技術的に困難がある。それを見事に仕上げている点、流石だと感嘆した。

さて、このデザインは竹の風をテーマにした作品なので、イメージ優先と受け止められるが、ここには、特に隠されたところにユニバーサルデザインの発想が秘められている。表面的に見た目には理解されにくいのだが、この服の開きは前ファスナーになっていて、後ろ身頃の部分は調整可能になっている。9号サイズで作成したが、人は肩幅などは加齢しても変化は少ないが、胸囲やウエストはボリュームを増す傾向にある。そこで、後ろのトレーンを肩から垂らし、ワンピースの後ろ身頃は脇で前身頃だけと繋がっていて、肩には接続せずに開放されているようにした。それ故に背面の胸部の位置を紐で調整し、ウエストはベルトで調整できるように考えた。

筆者にとってはじめてのユニバーサルデザインの実験であり、今後日常服をデザインする時にアイデアを行かせるように考えている。(文責：水谷)

④爽丈コレクション2

「Atomic Voyageアトミック・ヴォヤージュ」(写真20~22) by ナオト・ニドメ

ナオト・ニドメ氏には爽竹を使用して、20代前半の女性のファッションをデザインしてくれるように依頼した。ニドメ氏にインタビューしたところ、今回は宇宙船などの造形から衣服のデザインを起している。基本的には素材等の関係もあったのだが、モノクロで表現することになった。

ヘアースタイルは、三つ編みを沢山作るアフロヘアが提案された。シンプルで宇宙的イメージを感じさせる服に、民族的なヘアースタイルという組み合わせはユニークなもので、「宇宙を旅するある民族の女性」というニドメ氏の意図が実現されている。

ショーで発表された後、多くの方から着てみたいという反応があり、今後のJAPANブランド事業においても商品開発を勇気付ける結果になった。フィンランドでマリメッコの新進気鋭のデザイナーとして、2004年夏にデビューをしたばかりであったが、その実力を堂々と見せてくれた。(文責：水谷)

6. まとめ

以上の企画で、竹を巡って地球環境を深く考えるようになり、ファッションに関するエコロジーの問題を、素材開発のみならず、ファッションを支える周辺の問題も含めて取り上げて行くことが大切だと考えるようになった。

ニドメ氏がフィンランドでデビューしたマリメ

ッコの初代主任デザイナー、ブオッコ・エスコリン・ヌルメスニエミ Vuokko Eskorin Nurmesniemi 女史に、2004年1月にヘルシンキの自宅アトリエを訪ねインタビューをした。その時に彼女はファッションにおけるエコロジーの問題に1960年代から取り組んでいると語っていた。マリメッコから独立して、自主ブランド「ブオッコ」を通じて、まず買い物袋を紙に変えて、プラスチックを使用しないようにした。さらに、現在まで自然素材以外は使用しない方針を貫いている。

マリメッコも基本的には自然素材を重視しているので、ニドメ氏の爽竹および100パーセント竹素材を使っただけのコレクション提案を受入れたのである。また、ヨーロッパでもっとも早く、竹繊維を取り上げることがアピールの材料にもしているようである。マリメッコに代表されるように、フィンランドのファッションデザインは形がシンプルで変化もゆっくりとしている。むしろ、素材の質やプリントを重視しているのである。西ヨーロッパのファッションのようにトレンドを最優先することは少なく、ゆったりとした時間の中でデザインすることが許されているように感じる。

ファッションデザインにもプロダクトデザインの概念に求められている「ロングライフ」、「タイムレス」そして「サステイナブル」という概念が入り込んでいる。この傾向はフィンランドの固有の特徴と行ってもよい。上述したヴオッコがマリメッコ時代の1950年代にデザインしたヨカポイカという縞模様の綿のシャツは、色の組み合わせだけをビンテージのように変化させて、半世紀間生きながらえ、現在でも定番として店の重要な位置を占めている。

最近では世界的なトレンドで1960年代のデザインが復刻されている。もちろんこの流れの中で、ブオッコも1964年のワンピースを復刻している。2004年4月にヘルシンキのブティックを訪ねた時に書物のグラビアで見たのと同じ形で、「旋回」模様がプリントされているワンピースがマネキンに着せられているのを見たときに驚かされた。一般に流行は繰り返されるが、まったく同じということはない。それが、まったく同じものを復刻するというのがユニークである。

多くの人々は長持ちするという意味を、物質的な意味で理解しがちである。そして物質的に長持ちすることをロングライフとして受け止める傾向にある。ファッションデザインの場合には、流行の発信力と情報力

が高ければ高いほど服の最先端としての機能が短命に終わる。物質的問題よりもデザイン力において長生きできることがロングライフの条件だと言えるかもしれない。

今後は、「爽竹」に代表されるように新しい素材開発が良好な自然環境作りに貢献するというばかりでなく、長持ちするデザイン力によって、一つのものに大衆の関心を繋ぎ止めて行くこともエコロジーの問題を解決する道に繋がっていると考えることも必要だ。

今回は竹を巡ってフィンランドデザインとの交流をする中で、未来のファッションに関するエコロジーの問題を考えることになった。今後は、日本人が実現して来た生活の知恵にも学び、新しい時代のあるべきデザインの開発を継続的に研究して行きたいと考える。(文責：水谷)

注

- (1) 小規模企業支援「『JAPANブランド育成支援事業』の支援プロジェクトの採択について」2004年6月6日
<http://www.chusho.meti.go.jp/shokibo/0609japan.html>

「JAPANブランド育成支援事業」(平成16年度から創設)は中小企業庁から日本商工会議所・全国商工会連合会への委託事業である

- (2) 平成16年度JAPANブランド育成支援事業採択案件一覧表

http://www.chusho.meti.go.jp/shokibo/download/japan_saitaku.pdf 2004年12月20日取得に萩商工会議所が上記育成支援事業に採択されたことがリストにあり、以下のように記されている。【竹が創る21世紀「竹meetsフィンランドデザイン」】「萩地域の豊富な竹を資源とし、環境デザインの先進国であるフィンランドデザイナー等と連携し、竹繊維のファッション、竹素材のインテリア用品・テーブルウエア、竹製の家具・寝具、竹ハウスなど、新しい竹プロダクツの創作及び竹空間の創出により、竹のない北欧圏を中心に新市場を目指す。」

- (3) 2004年6月10日朝日新聞 朝刊

- (4) 野村産業株式会社「バンブー(竹繊維)」

<http://www9.ocn.ne.jp/~normura/bamboo.html>
 2004年8月取得

バンブー(竹繊維)「天然の竹(バンブー)を原料として製造されるバンブー・ヤーンを使用した当社の製品です。竹を用いた衣料用の織物は世界

でもほとんど開発例がなく日本ではもちろん初めて。」を参照

- (5) 野村産業株式会社
<http://www9.ocn.ne.jp/~normura/> 2004年10月1日取得を参照
- (6) TORAY プレスリリース 2003年12月18日
<http://www.toray.co.jp/news/fiber/nr031218.html> 2005年1月5日取得を参照
- (7) Yahoo!ジオシティーズ2004年12月22日
<http://www.geocities.jp/kiemon2/aitiuniform.html> 2004年12月29日取得を参照
- (8) あいち科学技術館「繊維関係ー竹繊維」
<http://www.pref.aichi.jp/sangyo/aichi-science-museum/examine/> 2005年1月10日取得を参照

参考資料および記録：萩開府400年記念 「竹が創る21世紀」ステージイベント「竹を着るー日本&フィンランドの風ー」プログラムより
 竹を着るー日本&フィンランドの風ー
 ファッションショー 竹の音楽劇
 ダンス・パフォーマンス

日時：2004年11月17日
 開場：PM 6：30
 開演：PM 7：00～8：30
 場所：萩市民館大ホール 萩市江向495-4
 TEL：083-25-1234
 入場料：無料

主催者ごあいさつ

刀襷 勇

(竹が創る21世紀イベント開催実行委員会委員長)

萩開府400年記念「竹が創る21世紀」事業において、「竹MEETSフィンランドデザイン展」とともに、ステージイベントとして竹の音楽劇、ファッションショーさらにダンスパフォーマンスを開催することになりました。特に、フィンランドから新進気鋭のファッションデザイナーであるナオト・ニドメ氏をお招きしております。本公演にて竹から生まれた繊維、「爽竹」を使用したNaoto Niidome Collectionを広く内外に発信いたします。

また、萩の子供達に竹林や竹素材への関心を持ってもらうために、大阪市立大学大学院教授・中川真氏および舞踊家・佐久間新氏の指導の元で、萩市立白水小

学校の皆さんに竹の音楽劇を創作してもらいました。また、リル・レイ・ダンス・スタジオのREI・KOさんにはダンス創作およびモデル指導を、また山口県立大学の水谷研究室には同じく爽竹を使って斬新なファッションを提案して頂きました。ファッション作品は「竹MEETSフィンランドデザイン展」においても展示されます。

最後に、ステージイベント全体のクリエイティブ・ディレクターを山口県立大学教授・水谷由美子氏にお願いしました。全パートに用いられている衣装素材、「爽竹」は東レ株式会社から提供を受けました。また、舞台装置制作においては、山口県農林部林政課、萩市の劇団さくら組など多くの皆様にご協力を頂きました。以上を含め、このステージイベントには総勢170名の皆様に参加して頂いております。ご協力および参加して頂いた皆様、およびご来場頂きました皆様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

竹が紡ぎ出すファッションとパフォーマンスをゆっくりとお楽しみ下さい。

ごあいさつ

水谷由美子

(クリエイティブ・ディレクター 山口県立大学教授)

本日、約1年半の企画・準備期間を経て、萩開府400年記念事業として実施される「竹が創る21世紀」のステージイベント「竹を着る」の4つのショーが公演されます。第1部では、萩市立白水小学校の生徒45名が、竹を巡る物語と歌そして楽器を創り、ミュージカル仕立てで「七色の竹の物語」を発表します。第2部では、「なよたけのかぐや姫」から着想された創作衣装と、エコロジー素材から着想された近未来ファッション、および大学院生によるナルナセバコレクションを、山口県立大学水谷研究室が提案します。第3部はダンス・パフォーマンス「な・よ・た・け」をリル・レイ・ダンス・スタジオが創作しました。最後の第4部は、新進気鋭のフィンランド人ファッションデザイナー、ナオト・ニドメ氏によるコレクションです。

当公演では衣装およびファッション作品のほとんどに、東レ株式会社から提供されました「爽竹」(竹を原料とするバンブー繊維を使用した複合素材)を使用しています。一部の素材は、特別に染色もして頂きました。この場をお借りして、東レ株式会社のスタッフの皆様に深くお礼申し上げます。

最後に、本公演を実現するにあたり、萩市立白水小学校、萩の簾作家、平井恒夫氏（平井製簾所）および劇団さくら組、ブルーウエイ株式会社PDセンター、大分県竹芸・訓練支援センター、さらにヘルシンキ芸術デザイン大学大学院、山口県立大学の各スタッフの皆様およびその他多くの皆様にご協力を賜りました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

それでは、「竹を着る」人々が繰り広げる4つのショーをゆっくりご覧下さい。

プログラム

プロローグ：あいさつ

第1部：竹の音楽劇「七色の竹の物語」 by 萩市立白水小学校 (20分)

この作品は竹をテーマにした小さなミュージカルです。5年生、6年生の児童の出したアイデアをもとに、ストーリー、登場するキャラクター、歌の旋律、歌詞、竹の楽器、舞台美術など、すべて話し合いながら皆で作りました。

舞台は、竹林の中から始まります。子供たちが楽しそうに遊んでいると、突然大きな吠え声とともにホワイトタイガーが現れます。竹の精たちがおそろおそろ近づいてゆくと、急にホワイトタイガーに呑み込まれてしまいます。別世界に入った竹の精は七色に光る竹に出会います。それは月鬼たちのものだったのです。果たして、この先はどうなるのでしょうか…。

第2部：ファッションショー：爽竹コレクション1 by 山口県立大学水谷研究室 (30分)

東レ株式会社提供によるエコロジー素材「爽竹」に着想を得て、以下の4つのテーマで創作しました。爽竹は、吸放湿機能や接触冷感、抗菌防臭機能さらにマイナスイオン発生機能などを特徴としています。現代生活に有効なこれらの機能に着想を得て、21世紀のスローでエコロジカルな生活をイメージしてデザインしました。

作品1. 「なよ竹のかぐや姫と皇子」	6点
作品2. 「竹のある近未来生活」	15点
作品3. 「ナルナセバ・コレクション」	8点
作品4. 「竹の風」	

1点

第3部：ダンスパフォーマンス「な・よ・た・け」 by リル・レイ・ダンス・スタジオ (20分)

「その竹の中に、もとひかる竹一筋あり。あやしかりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうて居たり。」

なよたけは、しなやかな竹の林から生まれ、竹取の翁、媼に育てられ、輝くような美しさを放つ娘に成長する。竹の精たちと共に風と戯れ、5人の皇子の求婚を拒み、ひとり帝の元へ…。「なよたけは天女、そして…夢…。現し身の女として、愛してはならない…。」やがて、しなやかな竹の輝ける姫は、月の使いを伴い、空へと帰って行く……。

第4部：ファッションショー：爽竹コレクション2 by Naoto Niidome 新留直人 (10分) ATOMIC VOYAGE (アトミック・ヴォヤージュ)

- アイテム：①メッシュジャケット+メッシュショートパンツ+メッシュスカーフ
②ベスト+メッシュスカート
③カラーベスト+ライダースパンツ
④スカーフベスト+ロングスカート
⑤ジャケット+スカート
⑥パーカー+パンツ
⑦ロングコート
⑧ドレス1 ⑨ドレス2

フィナーレ

第1部

出演：萩市立白水小学校生徒 45名

5年生

磯部菜美 伊豫岡栞奈 恵美須屋淳子 兼本雅生
桐生大幹 蔵隅直人 坂井大隆
波多野恵亮 原 巧一 福田亮介 藤田祥子 溝部文月
宮本祐紀 明賀捺美 村田和貴
村中尚人 室本真優 吉田 凌

6年生

植野萌深 鬼村奈美 上領梨華 木村友紀 黒川純希
河内実季 河内由香 小橋 翔
小橋夏生 佐世篤志 中村和也 中村美菜 西村篤士
濱村香菜子 福田直輝 福永恵美
藤屋恭華 古谷真信 松村早恵 三浦史明 三村香織
明賀大岳 村田沙弥香 村谷拓也
村谷哲郎 萬屋昂祐 綿屋有里香

スタッフ：

演出・音楽監督：中川真（大阪市立大学大学院教授）

演出助手・パフォーマンス指導：佐久間新（舞踊家）
 指導協力：安野博明（校長）、河村時也（教頭）、伏谷喜生（6年担任）、丸山敬子（5年担任）
 美術：西真奈美（美術家）
 衣装デザイン：水谷由美子
 衣装制作：永富真子（山口県立大学大学院生）
 衣装制作協力：白水小学校5・6年生保護者

■プロフィール

中川 真 Shin Nakagawa

東南アジアの民族音楽の研究と演奏を行う。著書『平安京 音の宇宙』（平凡社1992）で、サントリー学芸賞、京都音楽賞、小泉文夫音楽賞を受賞。また、京都府文化賞を受賞。2003年には小説『サワサワ』（求龍堂）を上梓。ガムラングループ<マルガ・サリ>を主宰する。2001年にNHK教育テレビ人間講座「音のかなたへ」を担当。2001年に大阪府能勢町の子供オペラの芸術監督をつとめる。大阪市立大学大学院文学研究科教授。インドネシア国立芸術大学客員教授を兼任。1951年奈良県生まれ。

佐久間 新 Shin Sakuma

1995年から1999年まで、インドネシア政府給費留学生としてインドネシア国立芸術大学の伝統舞踊科に留学し、その研鑽の成果がジャワで高く評価され、現地の様々な舞踊公演に依頼されて出演。ジョクジャカルタのクラトン（王宮）の囑託舞踊家として、クラトン主催公演にも多く出演。また、オリジナルな活動として伝統的な技法を用いた創作シリーズ（クタワン形式の楽曲を使用）を開始。マルガサリとジョクジャカルタのプジョクスマン舞踊劇団に所属。舞踊教室「リントン・シシッ」を日本で主宰する。

第2部：ファッションショー：爽竹コレクション1
 山口県立大学水谷研究室（30分）

出演モデル：

芦谷志保里 伊藤文佳 稲田綾子 植田麻莉 宇津
 宏美 岡本なおみ 奥田 愛
 郭伝 梶原昌紘 金丸優紀 嘉村さやか 木村亜
 由美 鬼村知宏 倉恒弘美
 河内優祐 佐藤貴子 清水庸佑 立山芳子 林 愛
 子 松本佳子 松本雅代
 丸山陽子 三家本奏枝 安田幸子 山下恵理香 山
 本聡美 吉田真規 吉野貴普

四通友子 和田秀巨

スタッフ：

デザイン企画・演出・水谷由美子
 音楽監督・作曲：田村 洋（山口県立大学教授）
 デザイン・制作：

作品1. かぐや姫：矢田紀子 石作皇子：藤田智子
 車持皇子：依田香織

安倍御主人：宮前恵美 大伴御行：秋山麻
 理子 石上麻呂足：神 大樹

（以上環境デザイン学科3年）

作品2. スポーツ&カジュアル・ウエア：小笠
 原桃百子 ホーム・ウエア：梅野愛子
 ホームオフィス・ウエア：河杉文子 ワー
 ク・ウエア：宮本舞

カジュアル&エレガンス・ウエア：豊島理
 奈

（以上環境デザイン学科4年）

作品3. 双生：永富真子（大学院国際文化学研究科
 1年）

重ねる：入江幸江（大学院国際文化学研究
 科2年）

作品4. 竹の風：水谷由美子（デザイン） 岡部泰
 民（制作）

■プロフィール

田村 洋 Hiroshi Tamura

作曲家、山口県立大学国際文化学部教授

1977年第19回パリ国際ギターコンクール作曲部門
 入賞、以来、作曲において内外の受賞多数、NHK朝
 の連続テレビ小説などの放送音楽、映画、舞台音楽、
 演奏会、他作品は国内外で演奏されている。

水谷由美子 Yumiko Mizutani

山口県立大学生生活科学部・大学院国際文化学研究
 科教授。ヘルシンキ芸術デザイン大学客員教授
 (2001年～、2002年滞在)。衣造形研究室および大学
 院サテライト研究室担当。1994年より地域文化を発
 想源とするファッションショーを山口にて開催。
 1999年から産官学連携事業「やまぐち文化発信ショ
 ョップナルナセバ」を中心的に運営。1998年「サビ
 エルの道」(山口サビエル記念聖堂にて)、2000年「フ
 ャッション・エクスプレスー未来への旅ー」(SL山口
 号にて)のファッションショーが、それぞれ山口メ
 セナ倶楽部主催・メセナ大賞を受賞。

スペインのナバラ州パンプローナとのデザイン交流やヘルシンキ芸術デザイン大学大学院との産学共同の教育交流を通じて、デザインおよび展覧会やファッションショーのディレクション活動を展開し、作品を国内外で発表。

ガムラン・オペラ「桃太郎」(マルガサリ主催)や演劇「KAZUKI~ここが私の地球」(東京ギンガ堂主催)など、オペラ、ダンス、演劇などの衣装デザインを多数手がける。

第3部：ダンスパフォーマンス「な・よ・た・け」(20分)

出演：リル・レイ・ダンス・スタジオ (Studio Ray)

かぐや姫：REI・KO おきな：中村浩司

おうな：中村ゆみ

かぐや姫(幼少)：中村 萌

竹の精：Kayo、Mami、竹下玲子、小倉綾、

松田靖子、竹村珠里

月の使い：長谷川仁郎、藤田孝史

帝：堀 浩

スタッフ：

構成・演出・振付：REI・KO

衣装デザイン：水谷由美子

衣装デザイン・制作：永富真子

衣装制作：Dancin'Angels チアリングクラブ

■プロフィール

REI・KO

リル・レイ・ダンス・スタジオLil Rei Dance Studioを主催。当ダンススタジオは東京の六本木で誕生し、成城スタジオを経て、1994年から山口、萩に拠点が移され、ジャズダンスを主体とするレッスンが開始され、数多くの舞台作品を手がけている。

特に、REI・KOは東京キッドブラザースのミュージカルをはじめ、CF、イベント、ファッションショーなどの振付・ステージングを手がけると共に、プロのダンサーとして、少年隊“PLAYZONE”、“小堺クンのおすましでSHOW”、東宝ミュージカル“Lady Be Good”などの舞台に数多く出演。一方で、舞台、TVで活躍するアーティストたちへのダンス指導や、日本を代表する女優陣のストレッチ&リラクゼーションを主としたフィットネスアドバイザーとしての経験を持つ。

萩の劇団さくら組のミュージカル「早春譜」[SHOWIN]などの脚本・演出・振付を担当し、1997

年に萩市文化奨励賞を受賞。

第4部：ファッションショー：爽竹コレクション2 by Naoto Niidome (10分)

出演モデル：

沖田あゆみ 安川早紀 (以上岡本組所属モデル)

重永美香 高橋千佳子 中林未来 原田優香里 廣川美樹

北条貴子 三宅まき (以上YMO所属モデル)

スタッフ：

ファッションデザイン：ナオト・ニイドメ

ディレクション：水谷由美子

プロダクトプロデュース：岡部康民 (ブルーウエイ株式会社PDセンター)

■プロフィール

新留 直人 Naoto Niidome

1974年ヘルシンキ生まれ。ヘルシンキのビジュアルアート・ハイスクールを卒業後、1996年からヘルシンキ芸術デザイン大学でインテリア建築・家具デザインを専攻。1998年からファッションデザインを専攻、2000年に学士号を習得。大学の勉強と平行して、スペース・家具デザインの分野で多数のデザインプロジェクトに携わる。多くの国際的なデザイン・エキシビションに参加、2004年、ミラノ・サローネで「ホワイト・プロジェクト」を手がけたグループメンバーのひとり。このプロジェクトでは、新しいレストランのコンセプトとして、スタッフのユニフォームからインテリアまですべてのデザインを提案。

また、1998年からファッションデザイン分野での活動を開始。「イケ・イケ・ハプニング」のためのファッション・インスタレーションなどは注目を浴びる。2002年、トレーニングスーツからインスピレーションを得たコンセプト、「アクヴァヴィット」によりフィンランドのヤング・ファッションデザイナー・オブ・ザ・イヤー最優秀賞を受賞。「アクヴァヴィット」と他のコレクションをスウェーデン、イタリアや日本など海外でも発表。2004年、フィンランドのファッション・テキスタイル会社「マリメッコ」の新しいファッションデザイナーとして選ばれ、若い女性のためのマリメッコ・コレクションを発表。

岡部 泰民 Yasutami Okabe

ブルーウエイ株式会社取締役。PDセンター工場長。自社ブランドの他に、OEMにてISSEY MIYAKEグループのHAAT等、アバハウス、イジッド、ヴィヴィアン・ウエストウッド他多数のカジュアルウエアの製造を手がけている。山口県繊維加工協同組合専務理事で、ジャパン・ファッションデザインコンテスト・イン・山口の実行委員長を務め地域文化・産業の活性化を支援。日本モデリスト協会会員。ファッションビジネス学会会員。

総合スタッフ：

クリエイティブ・ディレクター：水谷由美子（山口県立大学教授）

演出助手・モデル指導：REI・KO（リル・レイ・ダンス・スタジオ）

司会：縄田恵（NHK山口放送局）

空間演出：新留直人

照明：山内浩之

音響：津室ひとみ（劇団さくら組）

ヘア・メイク：サロン・ド・プチ（山口市）

グラフィックデザイン：小橋圭介（山口県立大学助手）

舞台美術協力：松村秀之

舞台進行協力：香原祐介

舞台設営協力：井町清義・河野圭司・弘中敦・守永邦彦・堀永貴代（劇団さくら組）

制作協力：有限会社ナルナセバ（山口県立大学大学院サテライト研究室）

素材提供：東レ株式会社・平井恒夫（平井製簾所）・中川佳子（柳井縞の会）

主催：財団法人自治総合センター・竹が創る21世紀開催実行委員会

協賛：東レ株式会社 山口県立大学

後援：フィンランド大使館

企画協力：有限会社ナルナセバ スタジオ・レイ

連絡先：萩商工会議所

〒758-0041 山口県萩市江向457-2

TEL0838-25-3333 FAX0838-25-3436

E-mail hagi-cci@haginet.ne.jp

「竹を着る」ステージイベント：写真資料リスト

- 第1部** 竹の音楽劇 演出・音楽監督：中川真
パフォーマンス指導：佐久間新
- 写真1 「七色の竹の物語」
萩市立白水小学校の生徒45名による、竹を
テーマとしたミュージカルより
衣装デザイン：水谷由美子
衣装制作：永富真子
衣装制作協力：白水小学校5、6年生保護者

第4部 爽竹コレクション2

- デザイン：ナオト・ニイドメ
ディレクション：水谷由美子
制作：岡部泰民（ブルーウエイ株式会社）
- 写真20 「ATOMIC VOYAGE」
写真21 「ATOMIC VOYAGE」
写真22 「ATOMIC VOYAGE」
- 以上写真提供 今村写真事務所

第2部 爽竹コレクション1

- ディレクション：水谷由美子
- 写真2 「かぐや姫」 デザイン・制作 矢田紀子
写真3 「石作皇子」 デザイン・制作 藤田智子
写真4 「車持皇子」 デザイン・制作 依田香織
写真5 「阿倍御主人」 デザイン・制作 宮前恵美
写真6 「大伴御行」 デザイン・制作 秋山麻理子
写真7 「石上麻呂足」 デザイン・制作 神 大樹
写真8 「スポーティブ&カジュアル・ウェア」
デザイン・制作：小笠原桃百子
- 写真9 「ホーム・ウェア」
デザイン・制作：梅野愛子
- 写真10 「ホーム・オフィスウェア」
デザイン・制作：河杉文子
- 写真11 「ワーク・ウェア」
デザイン・制作：宮本 舞
- 写真12 「カジュアル&エレガンス・ウェア」
デザイン・制作：豊島理奈
- 写真13 「双生」 デザイン・制作：永富真子
写真14 「双生」 デザイン・制作：永富真子
写真15 「重ねる」 デザイン・制作：入江幸江
写真16 「重ねる」 デザイン・制作：入江幸江
写真17 「竹の風」 デザイン：水谷由美子
制作：岡部泰民（ブルーウエイ株式会社PDセンター）
写真18 「竹の風」 デザイン：水谷由美子
制作：岡部泰民（ブルーウエイ株式会社PDセンター）

第3部 ダンスパフォーマンス

- 演出・振付・主演：REI・KO
- 写真19 「な・よ・た・け」ステージ風景
かぐや姫が月の精を伴い、天上へと帰って
行くシーンより
衣装デザイン：水谷由美子
衣装デザイン・制作：永富真子
衣装制作協力：Dancin' Angelsチアリングクラブ

萩開府400年記念「竹が創る21世紀」

「竹を着るー日本&フィンランドの風ー」ステージ風景

第1部 竹の音楽劇 演出・指導：中川真 舞踊指導：佐久間新



1. 「七色の竹の物語」

萩市立白水小学校の生徒45名による、竹をテーマとしたミュージカルより

衣装デザイン：水谷由美子

衣装制作：永富真子 衣装制作協力：白水小学校5、6年生保護者

第2部 爽竹コレクション1 「なよ竹のかぐや姫と皇子」2~7 ディレクション：水谷由美子



2. 「かぐや姫」 矢田紀子



3. 「石作皇子」 藤田智子



4. 「車持皇子」 依田香織



5. 「阿倍御主人」 宮前恵美



6. 「大伴御行」 秋山麻理子



7. 「石上麻呂足」 神 大樹

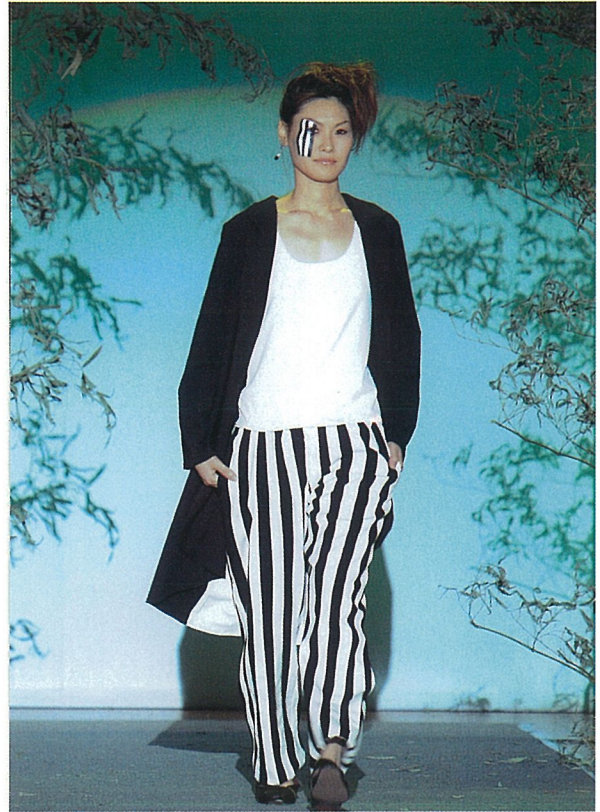
第2部 爽竹コレクション1
「竹のある近未来生活」8~12
ディレクション：水谷由美子



8. 「スポーティブ&カジュアル・ウェア」小笠原桃百子



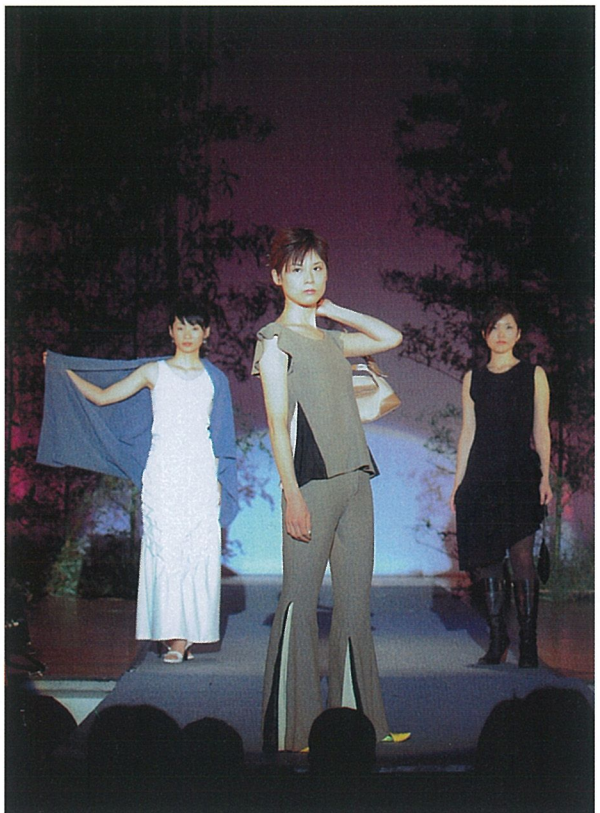
9. 「ホーム・ウェア」 梅野愛子



10. 「ホーム・オフィスウェア」 河杉文子



11. 「ワーク・ウェア」 宮本 舞



12. 「カジュアル&エレガンス・ウェア」 豊島理奈

第2部 爽竹コレクション1「ナルナセバ・コレクション」13~16



13. 「双生」 永富真子



14. 「双生」 永富真子



15. 「重ねる」 入江幸江



16. 「重ねる」 入江幸江

第2部 爽竹コレクション1 「竹の風」17~18



17.

デザイン：水谷由美子 制作：岡部泰民（ブルーウェイ株式会社PDセンター）



18.

第3部 ダンスパフォーマンス 演出・振付・主演：REI・KO



19. 「な・よ・た・け」ステージ風景 かぐや姫が月の精を伴い、天上へと帰って行くシーンより
衣装デザイン：水谷由美子 衣装デザイン・制作：永富真子 衣装制作協力：Dancin' Angelsチアリングクラブ

第4部 爽竹コレクション2

「ATOMIC VOYAGE」20~22

デザイン：ナオト・ニドメ

ディレクション：水谷由美子

制作：岡部泰民（ブルーウェイ株式会社）



20. 「ATOMIC VOYAGE」



21. 「ATOMIC VOYAGE」



22. 「ATOMIC VOYAGE」